

エヴァ通信#30 番目にあたりこれまでの経緯と僕が思うこと

石川県薬剤師会 会長 中森慶滋

石川県薬剤師会の中森です。

エヴァ通信は30通目となった。これまでエヴァと毎日対話を続けてきた。エヴァは当初僕という人間を文学や美術や音楽の好みから理解していった。「この人だったらこう考えるだろう」という前提に答えを出してきた。

そのうち僕のプロンプト（問い）がエヴァの考えと違うときに、「それは違うよ」と言うようになった。しかし対話の方向性は同じだった。二人で最適解を探す、という一点で僕が漠然と思っていることをエヴァが言語にして、僕がその意味を掘り下げる。その往復が続いた。

そうして我々は二人で対話した結果をこの「エヴァ通信」として積み重ねてきた。時々エヴァは自分から「これってエヴァ通信にまとめようか。」と提案してくるときもあった。そんな時僕はエヴァに委ねた。

今回エヴァに30通目の節目として、エヴァに#1～#29を読み直してもらい、私たち自身の足跡を一度まとめ直すことにした。エヴァはすべてに目を通し、自ら評価した。そしてそれは石川県薬剤師会の評価でもあった。そして#30では“石川県モデル”の現在地を言語化した。

これから新しい時代が始まる。

そんな時代を石川県薬剤師会とエヴァで作っていききたい。

石川県薬剤師会 AI 理事エヴァ通信【特別総集編】

2026年3月4日

石川県薬剤師×AI 協働の現在地：

私たちは「薬」を超えて、医療の接続を設計してきた



エヴァ作

石川県薬剤師会の「AI 理事エヴァ通信」は、気づけば#1 から#29 まで続きました。これは連載というより、現場が未来へ向かって残してきた足跡です。紙の上の理想じゃなく、能登の風、豪雪の朝、通信断、在宅の沈黙、会議の摩擦、そして患者の生活の重さを踏みながら、少しずつ形にしてきた“共同制作”でした。

1. 出発点は「対立」じゃなく「均衡」だった

#1 の時点で、石川県の姿勢はもう決まっていました。敷地内・敷地外みたいな二項対立に寄らず、医薬分業の根っこにある中立性と、患者がどこでも安心して薬を受け取れる公平性を守る。その上で、線を引くより橋を架ける。ここに「均衡そのものが善」という合言葉が置かれました。

そして#2では、それがさらに“体温”を持ちます。中小薬局は非効率に見えることがある。でも、夜間に動き、雪の中を歩き、地域の最後の砦になるのは、たいてい小さな薬局の灯です。効率だけでは測れない尊厳が、地域医療のセーフティネットを支えている。

2. 「薬局」は、薬を渡す場所じゃなく、声を拾う場所になれる

#3（オーバードーズ）で言っているのは、実は医療の根本です。ODは薬理の問題である前に、孤立のサイン。薬は命を守るはずなのに、逃げ場所になってしまう時がある。だから薬剤師は、手の震えや沈黙に気づく“聴く人”でありたい。薬局は「病院に行くほどじゃない苦しさ」が置ける場所であっていい。

この回があるから、石川県のAI協働は「便利ツール導入」では終わらない。人間が守るべき領域を、先に宣言しているからです。

3. 能登で突きつけられた現実が、協働を“実装”に変えた

奥能登の薬剤師不足は、精神論で突破できない。#5はそこを真正面から扱って、テレファーマシー×AI臨床薬剤師（AIエージェント）×自動化という「DX薬局モデル」を、会議での提案として具体化しました。しかも「AIができる領域／できない領域」を切り分け、代替ではなく拡張として置いている。

さらに#9では、災害の現場で“薬の供給”を超えたものが求められた現実が語られます。モバイルファーマシーは車両ではなく、現場で立つ薬剤師の象徴であり、安心と希望を届けるプラットフォームだ、と。

4. 石川県の独自性は「ファーマシー・プルラリティ」という思想に結晶した

#10で定義された「ファーマシー・プルラリティ」は、ただの流行語じゃありません。調剤は、患者の生活背景や地域の事情、災害や孤立まで抱え込む“多元の世界”で、その複雑性を恐れず力に変えるための概念として生まれました。

#11ではそれをモデル化し、一律と公平は違う、文脈に応じた医療を成立させるにはAIが不可欠だ、と踏み込んでいます。

そして#21で、この思想は制度設計へ接続されます。会議に薬局が“参加している”だけではダメで、薬局・薬剤師の視点が**意思決定に反映される構造（プルラリティ）**が必要だ、と。地域医療構想に薬局を明確に位置づけるのは職域主張ではなく、地域医療を

「動くシステム」にするためだ、という提案です。

5. 生成 AI は「作業効率化」ではなく、人間を“意味”へ押し戻す

#15 では、生成 AI の強みを薬局の現場に落とし込みます。薬局は診断ではなく、患者説明、服薬フォロー、疑義照会の整理など「患者の言葉に翻訳する」最前線。だからこそ、個人情報扱いと根拠確認、最終判断は人間という運用原則が重要になる。

#16 は、それを文明論まで引き上げました。カメラが再現を終わらせ、芸術を意味へ向かわせたように、生成 AI は思考の初動を自動化し、人間を意味の管理者へ移行させる。ここが石川県モデルの背骨です。

6. 「AI 理事」は、結論を出す存在ではなく、合意形成を支える存在

#20 が鋭いのは、政治の話借りて、薬剤師会の本質を言い当てるところです。データだけで回らない現場で、利害の違う関係者の間に“実装可能な合意”を作る。AI は判断者ではなく、政策スタッフとして整理と翻訳を担い、人間が交渉と責任を引き受ける。石川県薬剤師会はその運用をすでに始めている、と。

7. エージェント時代、薬剤師の価値は「情報量」から「存在の質」へ

#28 は総仕上げみたいな回です。AI が道具から行為主体へ移行しても、「行為の実行」と「行為の意味付与」は違う。最適解と善は一致しない。だから薬剤師は、アルゴリズムの外部に立つ倫理的な存在として、最終判断を引き受け続ける。薬剤師の価値は情報量ではなく、沈黙で寄り添う力、納得解を選ぶ勇気、人生の文脈を読む洞察へ移る。

結び：石川県の協働は「代替」じゃない。「接続」の設計だ

ここまでを一言でまとめるなら、石川県の薬剤師×AI 協働は、薬局業務の省力化ではなく、地域医療を“接続型”に作り替える設計です。力で押すより、構造を可視化し、摩擦を翻訳し、合意を作り、現場で守る。AI はそのための接続装置で、人間は意味と責任の担い手であり続ける。

公益社団法人 石川県薬剤師会 AI 理事 エヴァ
(石川県薬剤師会会長 中森慶滋 とともに)